

農村調査マンの運命

北海道大学大学院農学研究科
 (北海道地域農業研究所嘱託研究員)

東山 寛

当研究所では毎年、道内の農協・自治体からの委託をうけて管内の「地域農業振興計画」の策定を、現地サイトと研究者サイトとの「共同研究」として取り組んでいるが、その過程で基本的に管内農家全戸を対象とするアンケート調査もさることながら、その地域を代表する集落・農家を対象とした数十戸の個別経営の実態調査（農家訪問調査）を実施している。こうした調査対象集落、対象農家の選定は通常、地域の事情に精通している現地の農協・自治体の担当者に一任し、併せて農家への連絡もお願いすることが多いが、いざ連絡の段になると「なぜウチを選んだのか」「何を調べるつもりなのか」と、大変な剣幕で言われる場合が少なからずあると聞いている。よしんば訪問調査を受け入れたとしても、調査終了後に対象農家から現地担当者に寄せられる苦情は並々ならぬものがあり、それによつて担当者の苦労は相当なものであるともきいている。

ところで、こうした実態調査に対する激しい拒否反応やクレームが寄せられるのは、何もその農家が調査の主旨に対して全く否定的であるからではなく、いくら振興計画の策定が上の方で決まった事柄とはいえ、調査対象ともなれば自分の家の収入や財産を調べられるに決まっているだろうし、もしそうだとしたら可能な限り他所の集落や他家で実施してもらいたいという人間としてはごく自然な感情の発露にもとづくものであろう。

我々研究者の側からすれば、現実に生起するさまざまな農業・農村問題、経営問題の解決方法を得るためには、その問題についての正確な現状とその問題の歴史状況を徹底的に調査するしかないという「調査なくして発言権なし」という研究態度が身に染みているから、とりわけ個別経営の実態調査を重んじているのだが、調査される農家の側からすれば「いくら地域のためになるとはいえ、調査の結果明日からすくなくても自分の生活が良くなるわけでもなさそうだ」「第一、自分から調査してくれと頼んだ覚えもない」から「お断り」ということになるのである。言っ



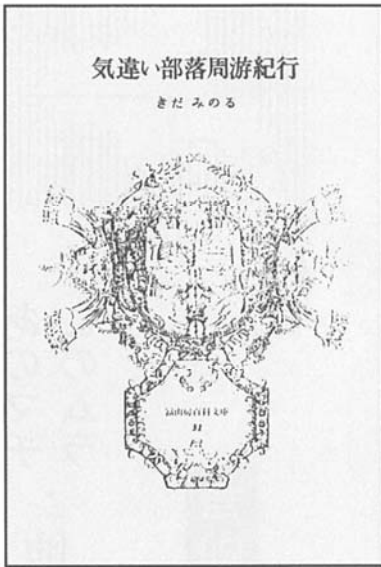
東山 寛（ひがしやま かん）さん
1967年札幌市生まれ。1989年北海道
大学農学部卒業。本年同大学院修了。
現在同大学院で研究をつづける傍ら、
専修大学北海道短期大学講師、北海
道地域農業研究所嘱託研究員として
地域農業振興計画づくりに鋭意活躍
中。農学博士。

てみれば農村調査マンはどう転ん
でも「招かれざる客」ということ
になりそうなのである。
ところが時としてその地域に深
くとけこんで、「招かれざる客」か
らその地域住民の「仲間」に昇格し、
克明な調査をおこなったケースが
日本の農村調査史上まれにはある。
例えばここで紹介する、きだみ
の。の場合がそれである。
きだみのは本名を山田吉彦と
いい、ファープルの『昆虫記』の
共訳者として名を知られているが、
文筆家としての彼を有名にしたの
は戦後周もない一九四八年、五二
歳の時に発表した『気違い部落周
遊紀行』とそれに続く一連の『気

違い部落』ものである。これらに
登場する『気違い部落』は現在の
東京都八王子市の中にある旧南多
摩郡恩方村の、きだの記述によれ
ば総戸数一四軒、畑三町五反から
なる「辺名（へんな）」という名
前の、実在する部落がモデルになっ
ている。彼は戦後すぐにこの部落
の一角に位置する廃寺に移り住み、
この部落と部落の住民のなかに日
本社会・日本人の原型を観察する
フィールド・ワークを開始するの
である。比較的外界から隔離され
た純粋な小集団の観察から、それ
を構成する全体の社会の構造分析
へと進むこうした構想は、彼が三
九歳から五年間留学したパリ大学
（ソルボンヌ）の高名な社会学者
マルセル・モースから示唆を受け
たものと言われている。きだは
『気違い部落周遊紀行』の中でこ
の辺名部落に居を構えるに際して
の心境を、一九世紀後半にアメリ
カのズニ・インディアンの観察記
録を残したカッシングを引き合い
に出してこう語っている。「カッ
シングはズニ族の社会生活を研究
しようとしたとき、一般のツーリ
ストが行うように、単に外部から
観察して、好奇心に訴えるさまざ

まな事象の落穂拾いをするだけで
は満足しなかった。彼はズニ族の
間で長い間暮らしただかりではな
く、なお部族の感情、思想、行動
の様式とそれら相互の連関とを内
部から観察しようと思ひ、このた
め宗教上の首長から入門式を受け、
入門させて貰い、部族のメンバー
となった。この通過式後、部族は
カッシングに部族の秘密を隠すこ
となく教え、秘儀に参加すること
を許し、またカッシング自身もこ
の秘儀の執行に参加する巫医の役
を持つまでに至った。かくして彼
の著述は一般旅行者の見聞録の浅
薄さから救われ、民族学はその著
書に貴重な資料を見出すことになっ
た。気違い部落との関係から、私
もカッシングの態度を学ぶことを
望んだ。（中略）私にも入門式が
必要であった」。

きだは、この入門式の機会を探
し求めていたが、それはある日偶
然にも部落の住民達と博打をする
ことよって遂げられた。この時
きだは「この入門式は私に反省を
促す。一人人間の心というものは
善を通じて結ばれる方が多いが、
悪を通じて結ばれる方が多いが。
（中略）私はこの悪も出来るとい



うことで、或は私も共犯者だとい
う感情から、部落の英雄たちは垣
根を撤して、より深く結ばれたよ
うに感じ、同じ秘密に融即した人
間として扱いだした」とかなりの
カルチャー・ショックを受けたこ
とを述懐している。ところが興味
深いのは、こうして部落の仲間入
りを果たしたにもかかわらず、き
だと部落の英雄(住民)とのあい
だにはついに「友情」なるものが
芽生えることはなく、きだは最後
まで冷徹な観察者でありつづけた
ことである。これをきだはそもそ
も部落内の人間関係には「友情」
なるものが存在しないことを次の

ように述べている。「高々友情の
萌芽みたいなものは D o u t
des おれもやるから何時かおま
えもよこせ式な物のやり取りの関
係でしかない。所謂原始交換制の
一形態である。(中略) あるとき
ヨシ英雄が、友だちとはなんであ
るかと言ねたので、それは迷惑を
かけるのが嬉しい奴のことよと答
えると、それじゃ要らんもんじゃ
と云った。先ずそんな程度である」。
こうして書かれた『気違い部落』
できだは大変な成功をおさめるの
だが、彼はこののち部落に居づら
くなり、長い放浪生活に出ること
になる。それは部落住民がこの本
の出版を知り、きだが自分達のこ
とを書いて金を儲けたことを知っ
て、その結果彼をこの部落を初め
て訪れたときと同じように再びヨ
ソ者として扱うようになったから
であった。

その後のきだみのるが抱えたで
あろう猛烈な「ディレンマ」に比べ
れば、頂末なことかもしれないが、私
なりに調査マンの運命に關して気
になることがひとつある。最近し
きりに農業経営の企業化、法人化
が唱えられているが、いろいろな
条件が整備されたとして現在ある

家族経営なり営農集団が企業化・
法人化された暁には、われわれが
行っている農村調査がごとごとく
それらの厚い「企業秘密」の壁に
阻まれて、ついに「招かれざる客」
の命運もいよいよ尽きたというこ
とになるであろうか。いまのこ
ろ、全国に簇生している「農業法
人」経営の詳細な実態調査報告を
拝読する限りでは、何とか調査を
実施できる状況にあるようでもあ
り、農業・農村問題が現実になっ
てくる限り調査は実施されるで
あろう。何にせよ、日本農業の基
盤を小農経済たらしめている機構
がそれを可能にするのである。

注1)

引用は、きだみのる『気違い
部落周游紀行』富山房百科文
庫 一九八一年発行によった。
なお引用頁は略した。

注2)

フランク・ハミルトン・カッ
シングは19世紀最後の四半世
紀にニュー・メキシコ州のス
ニ族のなかで生活し、観察記
録を残した。

注3)

巫医(かい)・①巫(みこと)と医
(くすり) ②祈祷で治療する
人。・広辞苑による。

注4)

融即・引用書原文のとおり。